

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

「祖母と祖母を支える家族の思い」

北星中学校一年 中西^{なかにし} 咲乃^{さきの}

私の母方の祖母は、アルツハイマー型認知症と診断されています。アルツハイマー型認知症とは、脳の神経細胞が通常より早く減ってしまふことで認知機能が徐々に低下していく病気です。

私が幼稚園から小学校低学年までは祖母の症状も比較的軽く、時々突然怒ったり、泣いたりするものの日常会話はでき、母の実家へ行った際は、認知症のリハビリにと近くのプールへ一緒に行ったり、木が周囲にたくさんある農免道路をゆっくりと時間をかけて散歩したりしました。しかし、徐々に症状は進行し、私が小学校四年生の頃、一緒に温泉へ行った際に私のことが分からなくなってしまったようで、母がそろそろ温泉から上がろうと声をかけると祖母が私に対して「この子は私と一緒に来たんじゃないよ。」と言いました。その後、母はこっそり私に「きつと私のことも介護員さんだと思っていると思う。分からなくなってきたんだね、嫌な思いさせてごめんね。」と謝ってきました。しかし、私は祖母が認知症だということを理解していたので、いつかは私のことも分からなくなってしまうのだろうと思っていたので、そのことはとても悲しいことだけれど、認知症である限り仕方のないことだと思いました。だから私自身は祖母の「この子は私と一緒に来たんじゃないよ。」という言葉あまり気にしないようにしていました。

その後も症状は進行し、毎回数回怒ったり泣いたりするようになり、家からいなくなることもあったため、ケアマネージャーさんの勧めもあり昨年の秋ごろから施設へ入所しました。

お盆に母の実家へ帰省した際、祖父が私たちに祖母を会わせようと施設を一時外出させ、母の実家へ連れてきてくれたのですが、症状は更に進行していて、私のことはもちろん、長年連れそった祖父のことも分からなくなっていたようでした。その様子を見て、私のことも祖父のことも分からなくなってしまうということを改めて実感し、胸が苦しくなりました。一人で歩くこともなかなか上手にできなくなっ

てしまったようで、常に祖父が手をひいて介助していました。表情も以前の祖母とは違いとても陰しく、皆で昼食を食べた際には、ほとんど食事も口にせず、なにか昔の辛いことを思い出したのか泣き出してしまいました。その様子を見かねた祖父が、「気分転換したら落ち着くかな。」と祖母をドライブに連れていきました。おそらく祖父は私たちに気を遣い、祖母を連れ出したのだと思いました。

祖母が家を出ていった後、母は「おじいちゃんもおばあちゃんも可哀そう。」と泣いていました。しかし、父は「可哀そうなのはお前の方じゃないのか。おじいちゃんはおばあちゃんのことをきちんと受け入れているよ。大変なことがあっても面倒を見れるのは受け入れている証拠じゃないか。」と言っていました。私は父の言葉に共感しました。また私は、祖母が突然泣いたり怒ったりしたとしても祖母を責めるのではなく、いつも寄りそっている祖父に感銘を受けました。私だったら少し嫌な気持ちになってしまうかもしれない。しかし祖父は違い、嫌な顔を一切せず祖母のために行動していました。私もそんな祖父のような行動ができるようになっていけたらと思います。

祖母の病気を通して、家族の中でも様々な思いや考え方があったことを知りました。しかし、どの考えも祖母を大切に思うからこそその考えや行動であると思いました。アルツハイマー型認知症は様々なことを忘れてしまう恐ろしい病気でもあります。祖母がいてくれたからこそ、家族が思いやり、それぞれのことを考えるようになり、本当の「寄りそう」という言葉を目の当たりにでき、支え合う大切さを学んだように思います。

ここ最近、祖母の病気の進行は早いように感じます。あと何回祖母に会えるか分かりませんが、その時その時を大切に祖母や祖父を少しでも支えられるように行動に移していきたいです。